

エレミヤ書18-20章「陶器なるイスラエル」

1A 作り替えられる器 18

1B 悔い改めないユダ 1-17

1C 思い直される主 1-10

2C 主を忘れる民 11-17

2B 舌による迫害 18-23

2A 碎かれる土の瓶 19

1B 子供の燔祭 1-9

2B 葬られる民 10-15

3A 周りにある恐れ 20

1B 迫害する祭司 1-6

2B 燃え盛る御言葉 7-18

本文

エレミヤ書18章を開いてください。私たちがこれまでエレミヤ書を読んできていて、一つ大きな葛藤を受けていると思います。それは、「主の力強い御手」と呼んだらよいでしょうか？本当であれば、こうなっていればよいのに、こうなっていなければならないのに、全く反対の方角に物事が進んでいる姿です。エレミヤが御言葉を語っているのだから、聞く人々が出てきて、悔い改める人が起こされるはずなのに、そうではなく、むしろエレミヤに対する反対が大きくなっている、という現実です。これであれば、語るのをやめればよいのに、と誤ってしまいます。しかし、主はエレミヤを語らせませす。それは、神のお心そのものだったからです。悔い改めないことを知りつつも、それでも届こうとする神の矛盾、それは忍耐深さと愛と言ったらよいでしょう。

1A 作り替えられる器 18

そこで主は、エレミヤ自身が理解できないことを行なわせている中で、ご自身を陶器師、イスラエルの民を陶器に喩えてお語りになり始めます。時は、エホヤキムが王となって間もない頃ではないかと言われています。

1B 悔い改めないユダ 1-17

1C 思い直される主 1-10

18:1 主からエレミヤにあったみことばは、こうである。18:2 「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」18:3 私が陶器師の家に下って行くと、ちょうど、彼はろくろで仕事をしているところだった。18:4 陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。18:5 それから、私に次のような主のことばがあった。18:6 「イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることがで

きないだろうか。・・主の御告げ。・・見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。18:7 わたしが、一つの国、一つの王国について、引き抜き、引き倒し、滅ぼすと語ったその時、18:8 もし、わたしがわざわざいを予告したその民が、悔い改めるなら、わたしは、下そうと思っていたわざわざいを思い直す。18:9 わたしが、一つの国、一つの王国について、建て直し、植えると語ったその時、18:10 もし、それがわたしの声に聞き従わず、わたしの目の前に悪を行なうなら、わたしは、それに与えると言ったしあわせを思い直す。

主がここでお語りになっている計らいを、よく理解する必要があります。午前礼拝で、私たちは陶器師と陶器の関係は、神は主権と力を持っておられて、主が望むままに事を行なわれるということを学びました。

しかし主は、それをご自分の力を示すためだけではなく、ご自分の憐れみを示す時にも現わされる主権だということです。主は、情け深い神で、怒るのに遅く、憐れに満ちておられます。ですから、主はたとえ、滅ぼすと言われても、彼らが主に立ち返るのなら思い直されます。また、神は正しい方ですから、幸いを与えると言われても、神を捨てるようなことをするのであれば、彼らにとって幸いを与えることは益にならないので、その幸いを控える、ということもあるのです。神は、ご自分の憐れみの性質に従って、ご自分の主権を行使されるのです。このことについては、ローマ 9 章でパウロが詳しく説き明かしています。「ローマ 9:15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。」

神のなされることについて、私たちは必ず、この働きを理解している必要があります。なぜなら、多くの人々が神の主権について聞く時に、それは運命か宿命であるかのように受けとめるからです。しかし神は、たとえ「必ず滅びる」と言われても、そのように言われるのは滅びないようにするため、予め警告しているからに他なりません。ヨナの預言のことを思い出してください。「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる。(3:4)」と叫びましたが、ところが、「ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着た。(ヨナ 3:5)」とあります。主は、それで滅ぼされなかったのです。エゼキエル書に、「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。(18:22)」とあります。

2C 主を忘れる民 11-17

この陶器師の家の所から出て、人々に語るように命じられます。

18:11 さあ、今、ユダの人とエルサレムの住民に言え。『主はこう仰せられる。見よ。わたしはあなたがたに対してわざわざいを考え、あなたがたを攻める計画を立てている。さあ、おのおの悪の道から立ち返り、あなたがたの行ないとわざとを改めよ。』18:12 しかし、彼らは言う。『だめだ。私たちは自分の計画に従い、おのおの悪いかたくなな心のままに行なうのだから。』と。

ここでの問題は、「だめだ」という言葉です。言い換えれば、「だめだ、できない。」と言っています。

これはあたかも、自分は自分の心の思ゆくままに、やっていくことしかできないと、自分がそれに運命付けられていると信じていることです。自分には、悔い改めることさえできないのだと言っているのです。このような反応を人間はしてしまいます。自分が犯している罪は、直りようがないのだ。悔い改めることはできないのだ。だから続けてやっていく、と信じているのです。しかし主が命じられている時は、できないことを命じることはないのです。「1ヨハネ 5:3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」神が愛しておられて、その愛を受けて、応答すれば悔い改めることができます。神のところに戻るのであります。ところが、そういったことに目をつむっています。「自分にはできない」と言って、自分を見つめている訳です。

18:13 それゆえ、主はこう仰せられる。『さあ、国々の中で尋ねてみよ。だれが、こんなことを聞いたことがあるか。おとめイスラエルは、実に恐るべきことを行なった。18:14 レバノンの雪は、野の岩から消え去るだろうか。ほかの国から流れて来る冷たい水が、引き抜かれるだろうか。18:15a それなのに、わたしの民はわたしを忘れ、むなしいものに香をたく。

主は、分かり易い例えで、彼らの変わりようへの驚きを表現しておられます。レバノンの雪は、ヘルモン山のことでしょう。そこから溶けた水がイスラエルのダンに流れ込み、それがガリラヤ湖の中に入っていきます。この流れはずっと変わることがなく、今もガリラヤ湖の水源となっています。それなのに、イスラエルは忘れてしまうということです。これは、私たちへの教訓ですね。自分の目の前にあることに近視眼になっており、それで神によってこれだけのことをしていただいたのに、忘れて、自分のことを求めてしまいます。

18:15b それらは、彼らをその道、いにしえの道でつまずかせ、小道に、まだ築かれていない道に行かせ、18:16 彼らの国を恐怖とし、永久にあざけりとする。そこを通り過ぎる者はみな色を失い、頭を振る。18:17 東風のように、わたしは彼らを敵の前で散らす。彼らの災難の日に、わたしは彼らに背を向け、顔を向けない。』

彼らが神を忘れ偶像に香をたくことは、古の安定した、しっかりとした道から、まだ開かれてもいない道に自ら入り込んでしまうのと同じだと言っています。そして、エルサレムの町が悲惨な結末を迎えます。この翻りを、ペテロは第二の手紙で次のように説明しています。「2ペテロ 2:20-22 主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったです。彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る。」とか、「豚は身を洗って、またどろの中にくる。」とかいう、ことわざとおりです。」

2B 舌による迫害 18-23

18:18 彼らは言った。「さあ、私たちは計画を立ててエレミヤを倒そう。祭司から律法が、知恵ある

者からはかりごとが、預言者からことばが減びうせることはないはずだから。さあ、舌で彼を打ち、彼のことばにはどれにも耳を傾けまい。」

ここはとても興味深い言葉です。彼らは口によってエレミヤを迫害することにはしていますが、まず、「私たちは計画を立てて」と言っています。陶器師なる主が計画を立てておられて、このようにすると言われていることに対して、「私たちが計画を立てる」として真っ向から反対しているのです。私たちが、陶器に徹していることは、葛藤があります。けれども、それを放棄してしまったら、このようにたちまち、自分で計画を立てて、推進していこうとしてしまうのです。

そして、彼らの矛先は「エレミヤ」に向かっています。エレミヤを攻撃しているのですが、エレミヤ自身が願って語っているのではないことに注目してください。自分も語りたくないのですが、主が陶器師であられるから、そのまま語っているのです。ですから、彼らはエレミヤを攻撃しているのではなく、神ご自身を攻撃しているのです。そして、他のほとんどが、祭司も律法からエルサレムは無敵であることを教え、預言者も神の声であるとしてバビロンから救われると教え、学者からも、今の情勢はバビロンから救われるのだと教えていました。これだけ大勢の霊的な権威のある人々が語っている。また世俗においても学者が同じ見解を示している。だから、エレミヤが惑わしているのだと、彼の語る口を閉ざそうとしました。私たちは、「大勢がこう言っているから」「この権威ある人がこう言っているから」という理由で、それが真理だと思っはいけないことを知らないといけません。聖書には、むしろ真理を語る預言者は少数派として生きていました。真理をしっかり保っているからこそ、その真理に引き寄せられる、神が引き寄せてくださる人々が集まるのだ、ということでもあります。

18:19 主よ。私に耳を傾け、私と争う者の声を聞いてください。18:20 善に悪を報いてよいでしょうか。まことに彼らは、私のいのちを取ろうとして穴を掘ったのです。私があなたの御前に立って、彼らに対するあなたの憤りをやめていただき、彼らについて良いことを語ったことを、覚えてください。

エレミヤは祈っています。これまでエレミヤはむしろ、主に対して彼らに善があるように祈っていました。彼らに対してよく話しました。私たちがこれまで見てきた通りです。ところが、その彼らはその言葉を聞くまい、としているのです。そしてあの手、この手を使って、彼を貶めています。そして、これは残念なことに現実として起こっています。福音宣教の働きにいる者に対して、執拗に怪文書みたいなものを送りつける教会関係者がいたり、クリスチャンと言えども、肉に従えば、ただの人と変わらないというパウロが、コリント第一 3 章で言った言葉の通りなのです。

18:21 それゆえ、彼らの子らをききんに渡し、彼らを剣で殺してください。妻たちは子を失い、また、やもめになり、夫たちは虐殺されて死に、若い男たちは戦いで剣に殺されますように。18:22 あなたが突然、略奪隊に彼らを襲わせるとき、彼らの家からの叫びが聞こえます。彼らは私を捕えよう

と穴を掘り、私の足もとに、わなを隠したからです。18:23 しかし、主よ。あなたは、私を殺そうとする彼らの計画をみな、ご存じです。彼らの咎をおおわず、彼らの罪を御前からぬぐい去らないでください。彼らを、御前で打ち倒し、あなたの御怒りの時に、彼らを罰してください。

これは、ものすごい復讐の祈りですが、エレミヤは自分のためというよりも、彼らの行ないがこれだけの報いを受けるにふさわしいことをして、そのまま裁いてください、という祈りと言ったらいでしょう。これまでダムが決壊を止めるのに必死で働いている人を、こいともあろうに中傷し、貶めていたら、その働きをやめて、決壊に任せるような祈りです。

詩篇にも似たようなものがいくつも出てきます。このような祈りをどう解釈すればよいのか？ 私たちは、敵を愛して、敵を祝福しなさいと命じられています。しかし、矛盾するようですが、実は一つにつながっています。エレミヤは、自分の手で彼らに仕返ししないように、仕返しする唯一、権利のある方に委ねているのです。正しく報いることのできる方が、天におられます。この方が不条理を正されます。裁かれるのは主であり、主の領域にこの事柄を持って行くのです。主が、良いことも、悪いことも、隠れたものも全てを裁かれることを知る時に、私たちは正常に機能できます。正常に機能できるというのは、自分の受けている仕打ちに心を思い煩わせることなく、主が命じられていることを行なっていくことに専念することができます。

2A 砕かれる土の瓶 19

そして次の預言に移りますが、再び「焼き物」を題材にした預言になります。

1B 子供の燔祭 1-9

19:1 主はこう仰せられる。「行って、土の焼き物のびんを買い、民の長老と年長の祭司のうちの数人といっしょに、19:2 『瀬戸のかけらの門』の入口にあるベン・ヒノムの谷に出かけ、そこで、わたしがあなたに語ることばを呼ばわって、19:3a 言え。

ベン・ヒノムの谷は、エルサレムの町の南に走っている谷です。地図を見ていただければ分かりますが、東には南北にケデロンの谷が走っています、そして南から北西に向かってヒノムの谷が走っています。そこに、「瀬戸のかけらの門」があるとありますが、これはおそらくは町の南にあるネヘミヤ記に出てくる「糞の門」ではないかと思われまます(2:13)。今でも、エルサレムの城壁の南の入口が「糞の門」と呼ばれていますが、そこは最も低い位置にあります。当時の糞の門は、もっと南、ダビデの町の南のシロアムの池のところがありました。そこに排泄物や、その他のごみの焼却となっていたところでもあります。そこに、町の代表者を連れて行きますが、土の焼き物の瓶を買いいます。

19:3b『ユダの王たちとエルサレムの住民よ。主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。見よ。わたしはこの所にわざわいをもたらす。だれでも、そのことを聞く者は、耳鳴り

がする。19:4 彼らがわたしを捨ててこの所を見分けがつかないほどにし、この所で、彼らも彼らの先祖も、ユダの王たちも知らなかったほかの神々にいけにえをささげ、この所を罪のない者の血で満たし、19:5 バアルのために自分の子どもたちを全焼のいけにえとして火で焼くため、バアルの高き所を築いたからである。このような事は、わたしが命じたこともなく、語ったこともなく、思いつきもしなかったことだ。

3 節の「この所を見分けがつかないほど」というのは、イスラエルの神をあがめる所としては、全く見分けがつかなくなってしまった、ということです。ここは、マナセが行ったことを思い出すといえます。「2列王 21:3-6 彼は、父ヒゼキヤが打ちこわした高き所を築き直し、バアルのために祭壇を立て、イスラエルの王アハブがしたようにアシェラ像を造り、天の万象を拝み、これに仕えた。彼は、主がかつて、「エルサレムにわたしの名を置く。」と言われた主の宮に、祭壇を築いたのである。こうして、彼は、主の宮の二つの庭に、天の万象のために祭壇を築いた。また、自分の子どもに火の中をくぐらせ、ト占をし、まじないをし、霊媒や口寄せをして、主の目の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こした。」

忌まわしい偶像礼拝の果てに、幼児犠牲を行なっていました。モレクという神は、快樂の神で、望まぬ妊娠をしたその子を、火によって真っ赤になった金属製の腕に載せ、その泣き声を掻き消すために太鼓を叩いています。主は、異教の慣わしの中でも、人身犠牲を行なう者は死刑に定められることを、レビ記 20 章 3-4 節で話しておられます。それだけ、忌まわしいことであったのです。そしてバアル信仰にも、この時にはモレク信仰で行われていたことを採用されていたようです。キリスト者が立つところの、根本的な倫理もまた、今、挑戦を受けています。例えばアメリカの統計ですが、中絶を受け入れられると答えた人は、プロテスタントの教会で 33%と出ています。¹このように、この世の慣わしとしては当たり前に行なわれていることですが、現実には幼児を殺している、ここに書かれている罪を、教会に通う人々も三割は認めてしまっているということなのです。

そしてマナセの後に、ヨシヤが宗教改革をしています。その様子も見てみましょう。「2列王 23:4-6 それから、王は大祭司ヒルキヤと次席祭司たち、および、入口を守る者たちに命じて、バアルやアシェラや天の万象のために作られた器物をことごとく主の本堂から運び出させ、エルサレムの郊外、キデロンの野でそれを焼き、その灰をベテルへ持って行った。彼はまた、ユダの王たちが任命して、ユダの町々やエルサレム周辺の高き所で香をたかせた、偶像に仕える祭司たちを、また、バアルや太陽や月や星座や天の万象に香をたく者どもを取り除いた。彼は、アシェラ像を主の宮から、エルサレムの郊外、キデロン川に運び出し、それをキデロン川で焼いた。彼はそれを粉々に砕いて灰にし、その灰を共同墓地にまき散らした。」そして 10 節には、「彼は、ベン・ヒノムの谷にあるトフェテを汚し、だれも自分の息子や娘に火の中をくぐらせて、モレクにささげることをないようにした。」とあります。汚す、というのは、死体の灰をまき散らすなどして、そこが再び宗教

¹ https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=1097223757016107&id=200290520042773

行為ができないようにしてしまうことを言います。ヨシヤはこれを、行なったのですが、エホヤキムが再開させたのでしょ。

そしてこの谷が、排斥物も焼却していく場所ともなっていき、新約時代には「ゲヘナ」と呼ばれます。イエス様が言われました。「もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。不具の身でいのちにはいるほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らを食らううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。(マルコ 9:43-44)」黙示録 20 章の終わりに、火と硫黄の池とも呼ばれるようになります。

19:6 それゆえ、見よ、その日が来る。…主の御告げ。…その日には、この所はもはや、トフェテとかベン・ヒノムの谷とか呼ばれない。ただ虐殺の谷と呼ばれる。19:7 また、わたしはこの所で、ユダとエルサレムのはかりごとをこぼち、彼らを敵の前で、剣で倒し、またいのちをねらう者の手によって倒し、そのしかばねを、空の鳥や地の獣にえじきとして与える。19:8 また、わたしはこの町を恐怖とし、あざけりとする。そこを通り過ぎる者はみな、色を失い、そのすべての打ち傷を見てあざける。19:9 またわたしは、包囲と、彼らの敵、いのちをねらう者がもたらす窮乏のために、彼らに自分の息子の肉、娘の肉を食べさせる。彼らは互いにその友の肉を食べ合う。』

ベン・ヒノムの谷が、虐殺の谷と呼ばれます。「トフェテ」というのは、異教の火によるいけにえの場所に関わる意味合いがあるそうですが、主をそれを虐殺の谷と変えられます。バビロンが攻めてきた時に、ここに死体を積み上げて、猛禽が食べるような状態にする。埋葬もされないようにすると言われます。そして包囲の間には、町の中で共食いをするようにされる、と言われます。哀歌 4 章 10 節にて、エレミヤは実際に自分がこのことを目にしたことを証言しています。「私の民の娘の破滅のとき、あわれみ深い女たちさえ、自分の手で自分の子どもを煮て、自分たちの食物とした。」まさに、生きた地獄絵ですが、ゲヘナがそのようなところであるということです。ここで大事なものは、主が彼らが行ったことに対して、その仕業への報いを与えられていることです。彼らが人の命を火を通らせることを行ないましたが、彼ら自身が自分たちの肉体がこのようにされるということを表しているのです。

2B 葬られる民 10-15

19:10 そこであなたは、同行の人々の目の前で、そのびんを砕いて、19:11 彼らに言え。『万軍の主はこう仰せられる。陶器師の器が砕かれると、二度と直すことができない。このように、わたしはこの民と、この町を砕く。人々はトフェテに葬る余地がないほどに葬る。19:12 わたしはこの所と、…主の御告げ。…その住民にこうしよう。わたしはこの町をトフェテのようにする。19:13 エルサレムの家々とユダの王の家々、すなわち、彼らが屋上で天の万象に香をたき、ほかの神々に注ぎのぶどう酒を注いだすべての家々は、トフェテの地のように汚される。』

ここでようやく、陶器師の器が使われます。この瓶を砕くんですね。まだこねている時には、やり直しができるのですが、焼いてしまってから欠陥が出ているのが分かったら、この瀬戸のかけらの門において、砕いて捨てられるだけです。18章の陶器師の陶器のたとえと、若干、ここでは適用が違います。ここでは、主ご自身がユダがご自分に属する民として、国として必要なことは全て行なわれた、神の良い作品になるはずことは全て行なった。それにもかかわらず、損なわれてしまっていた、ということです。あるいは、神は飢饉などの、いろいろな試練を与えられた。御言葉も与えられた。こうした精錬されるための火を与えられた後で、結局できたのが、偶像礼拝の深みであったということです。ですので、砕くしかない、ということです。

それから、主がヒノムの谷だけでなく、この町中にも死体が転がるということをエレミヤは預言しました。今のダビデの町の遺跡には、その時代の家屋の火で焼かれた後が出て来ていますが、そこには無数の偶像が見つかっています。

19:14 そこでエレミヤは、主が預言のために遣わしたトフェテから帰って来て、主の宮の庭に立ち、すべての民に言った。19:15 「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『見よ。わたしはこの町と、すべての町々に、わたしが告げたすべてのわざわいをもたらす。彼らがうなじのこわい者となって、わたしのことばに聞き従おうとしなかったからである。』」

代表者から離れ、場所もトフェテから主の宮に上がっていき、そして災いが来ることを預言しました。20章はその続きです。

3A 周りにある恐れ 20

1B 迫害する祭司 1-6

20:1 祭司であり、主の宮のつかさ、監督者であるイメルの子パシュフルは、エレミヤがこれらのことばを預言するのを聞いた。20:2 パシュフルは、預言者エレミヤを打ち、彼を主の宮にある上のベニヤミンの門にある足かせにつないだ。

これまでは口による攻撃でしたが、ついに物理的にエレミヤに危害を与えました。申命記 25章 3節には、四十までの鞭打ちをしてよいことが定められているので、この刑をエレミヤに行なったのでしょう。ちなみにパウロも、この鞭打ちを五度受けています(2コリント 11:24)。そして彼をさらし者にするために、門のところで足かせにつなぎました。

20:3 翌日になって、パシュフルがエレミヤを足かせから解いたとき、エレミヤは彼に言った。「主はあなたの名をパシュフルではなくて、『恐れが回りにある』と呼ばれる。20:4 まことに主がこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたを、あなた自身とあなたの愛するすべての者への恐れとする。彼らは、あなたの目の見る所で、敵の剣に倒れる。また、わたしはユダの人全部をバビロンの王の手に渡す。彼は彼らをバビロンへ引いて行き、剣で打ち殺す。20:5 また、わたしはこの町のす

べての富と、すべての勤労の実と、すべての宝を渡し、またユダの王たちの財宝を敵の手に渡す。彼らはそれをかすめ奪い、略奪し、バビロンへ運ぶ。20:6 パシュフルよ。あなたとあなたの家に住むすべての者は、とりことなって、バビロンに行き、そこで死に、そこで葬られる。あなたも、あなたが偽りの預言をした相手の、あなたの愛するすべての人も。』

「パシュフル」は「広がりがありにあり」という意味です。つまり、安全と平和が広がっているという意味が彼の名前にありますが、それをエレミヤは「恐れがありにあり」と変えました。そして、あなたもあなたの家も、と、パシュフルが私的生活において災いを被ることを宣言します。これが、彼の誇りだったからです。祭司の家という誇り、この町の財宝、富というものの誇りがあります。それらを取り上げると言われます。それから、彼が偽りの預言をしていたことについても、それゆえに裁かれます。テモテ第一 6 章には、違った教えをする者が、敬虔を利得の手段にすることが書かれています。こうした富への誇りと偽預言が関連していることは興味深いです。お金がたまるようなシステム、制度を祭司たちが持っていたのでしょうか。これは、新約時代も同じで、それゆえイエス様が宮清めをされました。

そしてもう一つ、偽りの教えは、本人はもちろんのこと、それを聞いた人も災いを受けます。言い直せば本人だけでなく、それを聞いて信じた人も地獄に行ってしまうということです。イエス様が同じことを言われました。「マタイ 23:15 忌むべきものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするからです。」

2B 燃え盛る御言葉 7-18

そして再び、エレミヤの神への祈りが始まります。

20:7 主よ。あなたが私を惑わしたので、私はあなたに惑わされました。あなたは私をつかみ、私を思いのままにしました。私は一日中、物笑いとなり、みな私をあざけります。20:8 私は、語るごとに、わめき、「暴虐だ。暴行だ。」と叫ばなければなりません。私への主のみことばが、一日中、そしりとなり、笑いぐさとなるのです。

「あなたが私を惑わしたので、私はあなたに惑わされました。」とエレミヤは言っていますが、これは何も本気でそう思っているわけではありません。彼らがそのようにエレミヤに語っている言葉なのです。エレミヤが惑わしを受けて、それでこんなことを語っているのだと物笑いとなっています。しかし、自分が神の言葉を語って、それでこんな仕打ちを受けているのだから、神が主権によってそのようにされたとも言えるのです。考えても見てください、私たちも正直、彼がいつも、バビロンに彼らが捕え移される言葉にうんざりしていませんか？ 何度も何度も、こういった「暴虐だ。暴行だ。」という神の宣告を語らなければいけないエレミヤは、大変だったという言葉ではあまりにも軽すぎます。そして、主から授かった言葉なのですが、それがずっと「そしりとなり、笑いぐさ」となっている

のです。

20:9 私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくに疲れて耐えられません。

ここが極めて大切な言葉になります。福音と主の言葉を語る者たちが、どこで神の召命を受けるか、ここにあると言っても過言ではありません。自分は語りたくないと思っている、けれども主がそうされている、という切迫感です。自分の意志では、必ず折れます。主の意志によって、また神の恵みによって今の自分が自分でいられるのです。パウロが、自分の使徒としての召しについて、次のように言いました。「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざに会います。(1コリント 9:16)」

スポルジョンが若い人々に語った「牧会入門」の中で、次のように説明しています。「天よりの召しの最初のしるしは、そのわざに対する熱心な願い、そのためにはすべてを捨てて顧みないという欲求である。(「牧会入門」52 ページ) また、ある牧師の言葉を借りてこうも言っています「もしならぬでられるなら、教役者にはなるな(同ページ)」他の職業で満足できるなら、それを行ないなさい。けれども、もしそれにはどうしても満足できない強く欲求があるなら、それが神からの召しである、ということです。

20:10 私が多くの人のささやきを聞いたからです。「恐れが回りにあるぞ。訴えよ。われわれもあいつを訴えよう。」私の親しい者もみな、私のつまづくのを待ちもうけています。「たぶん、彼は惑わされるから、われわれが彼に勝って、復讐してやろう。」と。

先ほど、パシフルに対して「恐れが回りにある」と預言しましたが、それを馬鹿にして言っている言葉です。「恐れが回りにある、と言っているが、何も無いじゃないか。じゃあ、エレミヤの周りに恐れがあるように、私たちが脅してやろう。」ということです。さらに、そして彼の近くにいる人々が、それに加勢しています。「彼は間違っている。間違っているとはっきり証明されたら、仕返してやるからな。」と言い合っています。近い人が離れ、かえって反対することは辛いことです。

20:11 しかし、主は私とともにあって、横暴な勇士のようです。ですから、私を追う者たちは、つまずいて、勝つことはできません。彼らは成功しないので、大いに恥をかき、それが忘れられない永久の恥となりましょう。20:12 正しい者を調べ、思いと心を見ておられる万軍の主よ。あなたが彼らに復讐されるのを私に見せてください。あなたに私の訴えを打ち明けたのですから。20:13 主に向かって歌い、主をほめたたえよ。主が貧しい者のいのちを、悪を行なう者どもの手から救い出されたからだ。

エレミヤは、主の励ましの言葉を思い出しました。青銅の城壁のようにすると、主は言われました。そのことに基づいて、魂を振り絞って自分を励ますように祈っています。そして、17章10節にもありましたが、主は「調べて、思いと心を見ておられる」方です。私たちがたとえ、外面で判断されても、主は私たちの心と思いを知っておられます。そして、高らかに賛美しています。自分のことを「貧しい者」と呼んでいますが、これは経済的なことを意味しているわけではありません。イエス様が、「心の貧しい者は幸いである。」と言われましたが、その貧しさです。主なしには、何もないという告白です。

ここまで読めば、私たちはクリスチャンの教科書と言えましょう。模範解答ですね、「あなたも、神の約束を信じて祈れば、困難の中でもほめたたえることができる。」と言えます。しかし、次の文章もある意味、私たちを慰めてくれます。

20:14 私の生まれた日は、のろわれよ。母が私を産んだその日は、祝福されるな。20:15 私の父に、「あなたに男の子が生まれた。」と言って伝え、彼を大いに喜ばせた人は、のろわれよ。20:16 その人は、主がくつがえして悔いない町々のようになれ。朝には彼に叫びを聞かせ、真昼にはときを聞かせよ。20:17 彼は、私が胎内にいるとき、私を殺さず、私の母を私の墓とせず、彼女の胎を、永久にみごもったままにしておかなかったのだから。20:18 なぜ、私は労苦と苦悩に会うために胎を出たのか。私の一生は恥のうちに終わるのか。

一気に、彼は落ち込みます。ほとんど鬱状態です。ヨブと同じように、生まれたことを呪いました。主にあってもたらされるあらゆる苦しみを受けている人々の生々しい姿です。このような繊細な感情の部分での起伏を味わいます。高らかに主を賛美したと思ったら、その後は急降下します。これはけれども、正常な姿だと思ってください。決して、キリスト者として恥だと思わないでください。むしろ、エレミヤも土の器、陶器師の手にある粘土にしか過ぎないです。それだけ、か弱いのです。全ての人がそうです、パウロも自分の弱さや恐れをコリント第二で話していますし、エリヤも同じく死ぬことを願い、そしてシナイ山にまで行きました。そして私たちの主ご自身が、ゲッセマネの園で、こう言われました。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。(マルコ 14:34)」その感情の起伏はまさに、主ご自身も身にまとわれた弱さであります。

宣教大会に行って、そこで、「落ち込んだことを聞いて、かえって慰められ、励まされますね。」と言って、自分の落ち込みを分かち合う時にその宣教師の方は、私たちに励ましてくださいました。主はこうやって、信仰の戦いに臨んでいる兵士たちを共に励ましてくださいます。痛みも共にし、前進して下さるのです。